司馬遼太郎

歴史と小説

集英社文庫

歴史と小説

0195-750230-3041

昭和54年6月25日　第1刷

定価はカバーに表示してあります

著者　司馬遼太郎

発行者　堀内末男

発行所　株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2－5－10

〒101

電話　東京（230）6361（編集）
（238）2781（販売）

印刷　凸版印刷株式会社

著者と了解のうえ検印を廃します　（落丁本・乱丁本はおとりかえします）

© R. Shiba　1979　Printed in Japan

集英社文庫

歴史と小説

司馬遼太郎

集英社版

目次

新選組……五
土方歳三の家……一九
幕末のこと……二四
竜馬の死……三九

＊

維新の人間像―萩原延寿氏との対談……六七
清沢満之のこと……一一二
ある情熱……一二五

＊

市民の独語……一三一
日本史のなかで暮らして思うこと……一五一
先祖ばなし……一八〇

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

旅のなかの歴史……二一一
軍神・西住戦車長……二五六
歴史小説と私……二七〇
日本語について……二八一
むだばなし……二八四

新選組

乱世には、えたいの知れぬ才子があらわれる。清川八郎がそれである。

羽前国東田川郡清川村の出身で、父は斎藤治兵衛という郷士であった。この家は代々治兵衛を襲名する家だったという。百姓とはいえ相当な富農だったにちがいないが、しかし武士の社会に出てみればたかが出羽百姓の子である。かれは斎藤を名乗らず、出身の村の名をとって清川八郎というペンネームのような名前をつけた。覚えやすくもあった。スターリンが、ヨセフ・ヴィサリオノヴィッチ・ジュガシヴィリという、百度唱えても記憶できない本名をつかっていたら、かれの運命はちがったものになっていたろう。革命家の名は、それが大衆の合言葉になるために、できるだけ覚えやすいものがいい。

八郎が志をたてて江戸へ出たのは、十八歳のときである。剣を千葉周作に、学問を安積艮斎（あさかごんさい）にまなんだ。どちらも卓抜した才があり、学ぶこと数年でみずから私塾をひらき、文武を教えた。

かれは、おのれの才を世に問おうとした。かれは縦横家の才があり、とても町の学芸の師匠でおわれる男ではなかった。ところが、かれの活躍の足場となるべき藩をもたなかった。こういう男の当然の道として、革命ブローカーになった。かれが薩摩か長州の藩士にうまれていれば、あ

るいは維新の元勲になっていたかもしれない。

かれが最初に接触したのは、幕臣のなかでも時代感覚の鋭敏な山岡鉄太郎と高橋伊勢守であった。かれらに大いに攘夷論を鼓吹し、自分の才気を売りこんだ。頭のいい幕臣のあいだで、清川の名はしだいに知られるようになった。

もっとも、攘夷論というのは清川の専売ではなく、当時の知的世論だった。のちの新選組も長州勢力も、攘夷論という点ではかわりはない。攘夷論さえとなえれば知識人とみられたし、それを遊説すれば志士と称せられた。清川は山岡らをけしかけ、「貴公ら新進有望の旗本の士が幕府の頽勢をもりかえさねば、だれがそれをする。しかるのち、幕閣をして攘夷を断行せしめねばならぬ」と説いた。初期の清川八郎は、佐幕派である。

ところで、幕府には頭痛のたねがあった。幕末も文久年間に入ると、諸藩の血の気の多い者があらそって脱藩し、京にのぼって「浪士」になることが流行しはじめたのである。当時、浪士という言葉は浪人と区別されて使われていた。浪人とは扶持を離れた者だが、浪士はみずから扶持をすて、志をもって藩を脱走した者をさす。

これらの「浪士」が続々と京に流入し、若い公家を煽動したり、公家と諸藩の間を周旋したり、攘夷的色彩のもっとも濃い長州屋敷に出入りして、桂小五郎ら実力派の手駒につかわれたりした。かれらは、京での生活に窮するにつれていよいよ尖鋭的になり、革命の到来の一時も早いことを翹望して矯激な言動に出る者が多くなり、幕府としては、捨てておいては、これら「浮浪之徒」が西国の大藩を説きつけて天皇を擁し、京都で政権をつくるおそれもあった。なんらかの手をう

たなければならなかったが、しかし幕府にはそれを制御するだけの政治力もなく、弾圧するには、手が白すぎた。その役の手先きとなるべき旗本御家人は、繊弱な都会人になりすぎていた。

卓抜なプラン・メーカーであった清川八郎は一案をたて、幕臣松平主税介（ちからのすけ）忠敏を通じて、時の政事総裁職松平春嶽に上書し、

一、幕府の職制外に一つの武力集団をつくる。

一、その組織に、天下非常の士を徴募し、心力を幕府に尽さしめる。

一、形態は浪士団ながら、これを官制下のものとするため、旗本のなかから豪傑卓犖（たくらく）不群の士を二、三えらんで総宰せしめる。

文久二年十二月八日、幕議はこれを採用した。

毒をもって毒を制するようなものだが、家康以来、軍事体制のまま天下の政治をとってきた幕府の治安維持力は、こういう革命勢力の前にはほとんど無力に近くなっていたことがわかる。いいかえれば、幕府の正規兵には、幕府の危機を担当する実力も気力もなくなっていた。武士集団である幕府が自分の危機をまもるために傭兵を用いねばならなくなったのである。歴史がえがいた痛烈な諷刺画といっていい。

幕府では、講武所剣術教授方松平主税介をして徴募にあたらしめたところ、たちどころに二百五十余人を得た。

いずれもあくのつよい男ばかりで、清川八郎、石坂周造、池田徳太郎など創立同人のほかに、根岸友山、分部総左衛門、山本仙之助、近藤勇、土方歳三、芹沢鴨などがいた。

幕府は鵜殿鳩翁をして浪士の取扱いにあたらしめたが、翌文久三年の春、京都に行動的な尊王攘夷論が沸騰しはじめたのをみて、この傭兵隊をいよいよ京都で使用することに決し、二月八日江戸を出発せしめた。

かれらをとりあえず、洛外壬生（みぶ）村の寺院、郷士の屋敷に分駐せしめて市中の警備にあたらせたが、浪士団の頭目格である清川は、着京早々奇妙な行動に出ている。

ひそかに尊王倒幕派の志士と接触しはじめたのである。かれの素志が尊王倒幕であるというよりも、かれの慧敏な眼が、すでに時勢が回天へむかいつつあることを洞察したのであろう。首鼠両端を持して機をみて乗りかえる用意をしておくのは、徒手空拳の才子としてやむをえない思案だったのかもしれない。

かれは、当時、過激派の青年公卿の巣窟であった学習院に出頭し、またまた例の建議癖を出し、上書をした。趣旨は「われわれ浪士一同、朝廷のために誠忠をつくすつもりである」というのであった。幕府の官費でつくった傭兵隊を、そのまま敵方へ売りこむようなもので、これには幕府方も狼狽し、別に理由をかまえて江戸へ引きあげさせた。浪士団の滞京わずか二十日であった。フランス革命における有能なオポチュニストだったジョセフ・フーシェは天寿を全うしたが、サムライが起こした日本の明治維新は、清川のような男を生かしておかなかった。清川は、江戸にかえってからほどなく、芝赤羽橋付近で佐々木唯三郎らのために殺された。

このとき幕命によって帰東したのが新徴組であり、京都の壬生に残留したのが、新選組である。

残留組わずか十数名だった。芹沢鴨、近藤勇、山南敬助、土方歳三、永倉新八、沖田総司らで、かれらは、残りはしたものの、なんら法制的な存在でもなく、経費がどこから出るあてもない。思案したあげく、京都守護職松平容保（かたもり）に歎願することになった。この時期の指導者は、近藤よりも芹沢であったらしい。

それまでの京都における幕府の機関は、京都所司代と町奉行であったが、これらの機関では、跳梁する過激浪士の弾圧や、複雑化した朝幕関係を処理することができなくなっていたために、その前年の文久二年閏八月、京都守護職を設け、初代松平容保に相当な専断権をあたえて二条城におらしめた。芹沢、近藤らは、宿所の壬生郷士八木源之丞方（現存）から婚礼用の裃を借用して登城し、「われわれこそ幕府のために身命をなげうつ志の者である」と開陳し、新しい浪士隊の結成を歎願した。

即日、容保は許可し、かれらの身分は京都守護職の「御預（おあずかり）」ということになった。容保には五万石の役料が出ているから、最初の経費はここから支出されたものだろう。このときに新選組が誕生し、かれらが最も好んだ「会津中将様御支配」という権威ある肩書がつくのである。

この日の模様については、子母澤寛氏が、昭和三年にかれらの宿陣であった壬生の八木家を訪ね、当時の模様を記憶している当主為三郎氏から次のような挿話を取材されている。

この日、芹沢や近藤が戻ってきた（二条城から）のはもう夜になってからでしたが、芹沢は真赤な顔をして酔っているようでした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「拝借の上下で、一同紋どころが同じだから会津中将の御重役も驚いたろうな。しかしまア八木さん（為三郎氏の父）、我々も万事上々の首尾だったから喜んで下さい」

と、こういう意味のことをいって、

「こんな愉快はない」

と大喜びでしたが、父に酒の無心をして、何でも一同で徹夜で飲んでいたようでした。

（子母澤寛氏『新選組遺聞』）

かれらがなぜこれほどに狂喜したのか。私は、両刀をさして武士のスガタだけはしていた彼等が、これによってホンモノの武士としての格付けをされたという階級的な喜びであったろうと思う。

この十数人のなかで、武士だったのは水戸浪士の芹沢鴨、同野口健司、同新見錦、同平山五郎、同平間重助、仙台脱藩の山南敬助ぐらいのもので、近藤系の者は、浪人の子か、百姓の崩ればかりだった。

近藤勇は、武州多摩川のホトリの調布石原村の農家の出である。幼少のころから剣を好み、八王子で道場をひらく近藤周助について天然理心流の剣を学び、見こまれて周助の養子になった。

ところが周助も、武士ではない。武蔵境小山村の百姓の出である。百姓、町人がみだりに苗字を名乗り、帯刀するなどは、幕府体制が堅牢なころはありうべからざることだったが、このころでは、庶人のあがりで、剣客、儒者になれば、そういう風体をすることが大目に見られていたの

だろうか。しかしいかにかれらが風体だけは侍の真似はしているとはいえ、人別帳には、おそらく苗字はなかったろう。身分も百姓だったはずである。

土方歳三も武州多摩郡石田村の百姓で、江戸に出て薬の行商などをしていたらしい。かたわら、近藤の道場である「試衛館」で剣をまなんでいた。

例の清川の浪士徴募の件が府内に触れだされたとき、近藤は門弟をあつめ、

「いまどき、こんな田舎で道場剣術をやっていても仕方があんめえ。ひとつ、みんなで応募して風雲のなかに乗り出そうではねえか」といった。

調布在の百姓道場である「試衛館」などというのは、江戸の内外にあまたある町道場のなかでも実力は三流、経営規模は四流程度のもので、近藤ほどの器量の者が、この風雲の時代に、この道場のあるじとして安住するには貧弱すぎたのであろう。

土方歳三、沖田総司らがこれに従い、隊内で試衛館閥をつくり、この結束が、盟主近藤勇をして新選組の総帥の位置にのしあげてゆくのである。

新選組結成当時は、隊内の系列は複雑で、どちらかといえば芹沢閥が強勢だったようである。近藤、土方らは、はじめ、表面ではこれに従いながら、ひそかに斃して主導権をにぎる機会をうかがっていた。

芹沢は、典型的な無頼漢だった。たとえば、四条堀川の呉服商菱屋でしばしば着物を買ったが、金をはらわず、番頭が何度も足を運んだが、

「後日、後日」

といって払う気配もない。主人の太兵衛が男よりも女のほうが交渉しやすかろうと思って、妾のお梅というのを壬生の屯所にやった。芹沢は掛けあいにきたこのお梅を白昼手籠めにして、情婦にしてしまい、借金もうやむやにしてしまっている。

芹沢の乱行がかさなるにつけ、謀才のある土方は近藤に、かれを斃すことを献言した。むろん、粛清によって試衛館閥が権力をにぎろうとするためだが、それだけではない。

これは、のちの新選組の性格を知る上で非常に重要なことだが、近藤、土方には、武士道についての病的なほどに強い美意識があった。

かれらは武士にあこがれて剣術を学び、幕府の御用浪士になることによって公認の武士になったが、それだけに、現実の武士以上に武士たろうとした。近藤、土方は、「士道不覚悟」という理由でどれだけ多くの隊士に切腹を命じたかわからないが、江戸中期までなら知らず、こういう酷烈なばかりの武士道主義は、当時の世間では、よほど田舎へでもいかなければ見られなかった。百姓あがりの近藤、土方が、武家出身の芹沢を、

「士道不覚悟」

をもって嫌悪した。出身についての劣等感があっただけに、必要以上に士道的な美意識をこの二人はもっていた。

しかし、その粛清の仕方はあくどい。当時の武士階級の者なら、とうてい思いつきもしないほどの陰険な手段を用いている。美意識では武士だが、やり方は武士ではない。ロシア革命における貴族出身の革命家と労働者出身の革命家との性格の相違を思いだすがいい。党内の派閥闘争に

おける近藤、土方の陰険な知恵は、先祖代々、地頭に支配されてきた階級の出身者のみがもつ特有のものといえるだろう。

芹沢が殺された日、夕方から芹沢、近藤、土方は、隊士全員を連れ、島原の角屋（すみや）へくりこみ、一同かつてないほどに泥酔した。泥酔させるように土方が運んだのであろう。

ちなみに、近藤、土方はあまり酒がのめず、芹沢は名うての大酒家だった。この夜、かれは正体がないまでに泥酔した。

芹沢は、その子分平山五郎、平間重助とともに壬生八木源之丞家を宿所にしていたが、三人が八木家にもどってきたのは、当夜の十時ごろであった。八木家の下男が玄関からかつぎ入れたほどにかれらは酔っていたという。

角屋での酒宴で酔わなかったのは、近藤と土方、それに沖田総司、原田左之助など、その一党だけだったろう。

深夜、この四、五人が、息を殺して芹沢の寝所に忍びこんでいる。芹沢は、お梅を横に寝かせ、下帯もつけぬ素っ裸で熟睡していた。侵入者は、芹沢の刀を遠くへほうりなげ、一刀をあびせかけると、芹沢はけもののような声をあげて起きあがった。

逃げようとする背後を、たれかが一太刀あびせようとしたが、剣尖が高すぎたためにカモイに切りこんだ。そのすきに芹沢は縁側へのがれたが、たちまち物に蹴つまずいてころび、そのすきにつけ入った刺客のために致命傷を受け、さらに数歩、足をもがかせて別間へ倒れこみ、そこでなますのように切られた。

お梅も、ふとんの上で惨殺され、死体は、みだらな姿になった。別室に寝ていた平山五郎も首のない死体になって、あとで発見された。平間重助のみは難をのがれて屋外に出、そのまま新選組を脱走して世間から消息を絶った。

近藤閥の者は、当時、八木家のむかいの前川家を宿陣にしていたが、八木家からの急報をきき、なに食わぬ顔をして近藤以下がやってきた。

かれらは惨殺現場をしさいに取りしらべ、まことしやかに「長州の奴ではないか」などと犯人の詮議ばなしをしたりした。八木家の家人は、その演技のしらじらしさに慄然とした。

芹沢の葬儀は、文久三年九月二十日、新選組の手で盛大に行なわれている。内外には病死と公表された。近藤は、友情あふるる弔辞を読んだ。近藤にすればこの葬儀は、いくら盛大にしても盛大すぎることはなかったであろう。なぜならば、この日をもってかれは新選組の主導権をにぎったからである。

この後、隊士はふえ、京における新選組の実力と活動は、倒幕勢力をふるえあがらせたが、なかでも元治元年六月五日の池田屋の斬り込みがその活動の白眉といっていい。

池田屋事件については紙数がないから紹介は割愛するが、これによって新選組の戦闘力は、高く評価され、松平容保に対し、幕府から「感状」まで出ている。くわしく調べないとわからないが、元和偃武以来、島原ノ乱をのぞいては、幕府が感状を出したのはこのときぐらいのものではないか。よほどの武功とみられたはずである。

話は前後するが、新選組には奇妙な武勇譚もある。ついでに触れておく。

新選組は、その隊費を潤沢にするために、大坂の鍼医出身の副長助勤（中隊付将校）山崎蒸などを下坂させて、鴻池などからしばしば金を無心していたが、芹沢鴨、近藤勇みずから出かけることもあった。

文久三年七月十五日、この二人が同勢をつれて下坂し、京屋忠兵衛方に投宿した。夕刻大川に納涼し、中之島の鍋島浜で涼み舟をすててキタの新地に繰りこもうとした。途中、むこうから酔歩を運んできた大坂相撲の一人がたわむれて両手をひろげ、行く手をさえぎった。

芹沢は、ものもいわず抜き打ちでその酔漢を斬りすてた。そのあと、新地の住吉屋で大いに遊興したが、にわかに下の路上がさわがしくなったので見おろしてみると、力士五、六十人が手に手に樫の八角棒をにぎって怒号していた。復讐にきたのである。たちまち狭い路上は修羅場になった。このとき力士は数名斬殺され、新選組側は手傷を負った者もなかった。乱闘は、途中で駆けつけてきた相撲の年寄が詫びを入れ、力士側の斬られ損でおわった。

近藤は翌日、奉行所に出頭し、右の次第を届け出て去ろうとした。係り与力は、大坂では当時、名与力として市中で評判の高かった内山彦次郎である。内山は、市政官として当然のことをいった、「すでに数人の死人が出ている以上、届け放しでは済まされませぬぞ」

近藤の顔に怒気がのぼった。なぜかれが怒ったかを推察するに、内山は、新選組を「浪人」とみたのである。武士ならば、その身分の者が事故を起こした場合、所属藩が処置するが、浪人、町人などの場合は町奉行所が担当する。武士のつもりの近藤にとって、これほど自尊心を傷つけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com